心はいつも旅する

ユーラシアンホットライン

1998.10.30
VOL－10

１１月８日のユーラシアンフォーラムのご案内

時間：午後２時から
場所：練馬区役所１９階中会議室
スピーカー
①M. ビレグさん（法政大学大学院生）
「ストリートチルドレン支援基金について」
②ウズベキスタン政府留学生
ウスマノフ　ファルーフ
「留学生と中央アジアの未来」
ザヒドフ　シェルゾド
「ウズベキスタン」
入場料：会場費として５００円

●アイヌのチセ（小さなワラ小屋）が完成、祝う会開催

東京アイヌ協会の浦川治造会長が秋川渓谷に復元していたチセが完成しました。秋川渓谷の支流、養沢川にせり出した３０坪程のデッキに２棟（１棟約１２畳）を建設したもので、今後アイヌの生活文化を伝えていく起点として、地域住民を含めた新しい人間関係を作る場として使用されることになります。周辺には、畑が広がり、昔ながらに農家が点在する長閑な場所で、眼下には清流が流れ、岩魚やヤマメが泳ぐ姿を見ることができます。浦川さんはこれまで、世界の少数民族が自由に懇談できる場所として、山梨県大月市にポロチセ（大きな家）を私費を投じて建設しましたが、今回のチセはアイヌを中心にした文化交流の拠点として２個所目。以下の予定でチセ完成祝いの会が開かれます。

日時：１１月１５日（雨天決行）
午前１１時～午後４時まで
場所：東京都あきる野市乙津２３４７
会費：３千円
連絡先：浦川治造（℡０４２－５９６－６２１８）
内容：アイヌの料理を食べながら、北海道から講師を招き、生活文化について語り合う。
＜交通手段＞
ＪＲ武蔵五日市駅下車。10:00, 11:00, 12:00 にワゴン車が送迎します。

●「オロチョン族の若者育成に支援を」 2
―オロチョン族のために活動する岩間さんからアピール― 2
［岩間さんへの手紙］ 2
●モンゴルのドキュメンタリー映画上映運動に協力しよう 2
■＜報告／小出郷紅葉ツアー無事終了＞ 3
●奥只見合宿で「ユーラシアンロード、回廊構想」を提案 3
■文化講座「ユーラシアの古代文字」好評のうちに３回終了 3
●キルギス・アカーエフ大統領来日歓迎パーティー 4

（発行）ユーラシアンクラブ　（住所）川崎市麻生区王禅寺２４８５－２－２０４
電話044－965－2536　ﾌｧｯｸｽ044－965－2537　ＵＲＬhttp://member.nifty.ne.jp/EURASIANCLUB

●「オロチョン族の若者育成に支援を」

― オロチョン族のために活動する岩間さんからアピール ―

インターカレッジ文化講座のトップバッターで講師をお願いした岩間典夫さんから支援のご相談がありました。親しくしている中国小興安嶺の先住民族オロチョン族のリーダー２人から連名で、「オロチョン族のリーダー育成を支援して欲しい」との手紙を岩間さんに託し、支援方法の検討を求められたもので、今後、岩間さんともよく相談しながら、ユーラシアンフォーラムでも取り上げていきたいと考えています。

手紙の内容は以下のとおりです。

［岩間さんへの手紙］

岩間典夫先生

こんにちは。私たちは、あなたと、家族の皆さんのことをいつも考えています。

今年の７月１５日にハルビンのテンガ飯店でお話をしたことがいまでも思い出されます。オロチョン族は、最近の何十年来社会とともに進歩も発展もしました。しかし歴史と環境の基礎になる問題で、その他の民族に比べると大きな差別があります。その原因は、主に文化の教育が遅れていることです。何十年来、政府はこの方面においてたくさんの援助をしてくれました。特に、村には小学校を建てて、中学校にオロチョン族が行かれるようになっています。しかし改革開放の時代になってから、住んでいる今の土地から離れてよその土地にある大学や専門学院に入学することは一番困難です。それは学校の学生が授業料を自分で払うようになったからです。それとともにオロチョン族は大学の試験を受ける人が少なくなり、また試験を受かった人も大学を中途半端で退学するようにになりました。一つの民族はもし大勢の自分の民族出身の専門家やリーダーがいなければ生きていくことができません。何年来、私たちも、このために本当に注意を喚起しておりますけれど、この問題がまだ解決していません。現在、政府の部門にお願いして、支援を受けようと思っています。私たちの計画は、オロチョン民族研究会の名義で一つの委員会を作ろうとしています。その委員会を通してどこからでも援助をいただき、その資金を使って、オロチョン族の大学生たちを補助したいと思っています。できるだけ岩間さんも日本で、援助者を探していただけませんか。現在、一人の大学生を卒業させるには、３万元から５万元（１元：１５．６円）かかるので、今のオロチョン族の経済状況では困難です。そのため私たちは、このような委員会を作ったのです。この委員会を通してオロチョン族の少数民族の文化を発展させようと願っています。私たちもそのため、オロチョン族民族復興策のために一生懸命働きます。近くハルピン市で全省のオロチョン族研究会をするため準備中です。

黒竜江と嫩江、松花江が洪水です。私たちはそのため働いています。最後に、岩間さん何かのときに、来たときには慌てて帰らずに、ゆっくりハルピンにいて下さい。お体を大切に。またあいましょう。

岩間　典夫さんの話「オロチョン族は昔は狩猟民族で専門的知識や文化から遠かったが、今の時代、民族や文化が悪くならないようにするには若者が教育を受け村に貢献することが必要だ。オロチョン族は人口、わずか６８００人。オロチョン族と５０年生活したが帰国後２年半が経った。９月には、オロチョン民族研究会の理事をしていた次男も日本にきたので、よく相談し、現地の具体的支援策を聞きながら日本で支援を呼びかけたい」と今後の援助を希望している。

●モンゴルのドキュメンタリー映画上映運動に協力しよう

モンゴルの興味深いドキュメンタリー映像が注目されている。映像の名前は「**四季　遊牧 ― ツェルゲルの人々 ―**」。時代の変化に対応する家族の暮らしを通して、モンゴルの生活文化、伝統、自然の移り変わり、人々の人生観から苦しみや楽しみを描いた、興味深いドキュメンタリー映画。

映像は、モンゴルの社会の文化人類学的調査の一環として記録されたものを調査隊の日本側責任者、滋賀県立大学の小貫雅男教授が中心となって、「第１部　厳冬に耐える一再生の道」（上下２巻、１４２分）「第２部　春を待つ、そして夏―試行を重ねる」（上下２巻、１６５分）「第３部　忍び寄る秋―歓喜、そして思索」（上下２巻、１６５分）の三部作にまとめたもの。すでに、「お弁当二つの上映会」として、朝１０時から夜８時までの映画会が関西で開催され、感銘を与えている。

＜映画の構成とあらすじ＞
1992年の晩秋、日本・モンゴル共同ゴビ・プロジェクト調査隊の越冬チームが、東ボグド山ツェルゲル村に入った。長く厳しい冬の到来。吹雪の直前に、一冬分の食肉を準備したり、谷間の潅木の間から薪を集める。新しい時代に対応した協同組合ホルショーづくりの呼びかけ。
旧正月。伝統的な暮らしの日常と市場経済に対応したカシミヤの販路開拓という遊牧民の新しい仕事。
雪解けから春の陽気への季節の移り変わり。大地や子供たちが動き出し，ヤギの乳絞り、乳製品づくりに女たちも忙しくなる。夏営地では男たちは馬乳酒を作り、さらに山を登りながら暮らしを楽しむ夏。
……。
映画監督の山田洋次氏も「一度見出したら席を立てない。モンゴルの遊牧民の暮らしのようにゆったりとした時間に包まれながら、終わりまで見てしまう―この作品にはそんな不思議な魅力がある。学術的な記録として撮られた画像なのだろうが、これはもう、作品である」と推薦しています。
クラブでは、オフィス遊牧民・モンゴルレター（編集長・栗原広之）らと協力し、多くの人に鑑賞してもらう機会を作りたいと思います。ご協力いただける方はご一報ください。

■＜報告／小出郷紅葉ツアー無事終了＞
１０／１０・１１日、恒例の小出郷紅葉ツアーを実施、クラブ会員、群馬県の 後藤康子さん、静岡県の杉山一道さん、富山県の宮田浩行さんらを加え約２０名が参加し、地元からも小出郷文化会館・館長桜井さん、湯之谷村前助役、星正和さん、グリーンファームの橋守さんも一晩を一緒に過ごし暖かいおもてなしを受けました。恒例となった電気も水もない手作りの山小屋で過ごす１晩は、普段意識することのない文明の便利さ・有難さを改めて実感出来ます。今回の紅葉ツアーは、定期的に東京で行われている＜ユーラシアンフォーラム＞の場所を新潟県・小出郷に移し、美食と美酒に酔い、天然の名湯に漬かりながら真剣な討議が行われ、クラブの今後の活動方向、在日ユーラシア人との交流（今回はウズベギスタン・サハから４名が参加）を通し、お互いに理解を深めました。　　（報告・加藤優幸）

●奥只見合宿で「ユーラシアンロード、回廊構想」を提案

クラブが１０日行った奥只見合宿で、大野は「新潟から東京を結ぶ上越新幹線、関越自動車道沿線を、ユーラシア諸民族の文化、歴史、社会と人々に関心を持ち、理解、親睦、協力活動を推進する”ユーラシア国際派”が多く住むユーラシアンロードにし、富山、岐阜、山形へとユーラシアン回廊を広げる」戦略を提案しました。
現在２回実施した「ユーラシア・コミュニケーション・フェスｉｎ小出」を安定させる努力の一環として、小出地域での話し合いと同時に、複数の地域で開催することで開催地の財政負担を軽減し、さらに積極的拠点作りを目指すものです。
当面「ウズベキスタン文化交流センター」の設置を核にスタートしますが、並行してキルギス文化村、モンゴル文化村、サハ北方少数民族村、先住民族アイヌ文化村など「そこにいけばユーラシアがすべてわかる、体験できる―ユーラシア・レインボープラン」というキャッチフレーズも考えてみました。
５日には、群馬県・前橋グランドホテルで、地元会員らとユーラシア文化拠点作り懇談会を開催すると同時に、毎月１回のユーラシアンフォーラムでも留学生を含めた条件作りの話し合いを行いたいと考えています。山小屋合宿でウズベキスタン留学生アリシェル君から提案のあった「留学生チームとのサッカー親善試合」も企画に盛り込まれています。

■文化講座「ユーラシアの古代文字」好評のうちに３回終了
今年で７５回を数えるインターカレッジ文化講座”ユーラシアンフォーラム”の秋季１０月講座は「ユーラシアの古代文字」をキーワードに「ユーラシア古代文字の系譜」（森安孝夫・大阪大学教授）「モンゴル高原の古代トルコ語碑文調査」（片山章雄・東海大学助教授）「ユーラシア古代”記号文字”の謎」（宇田川洋・東京大学教授）の３回講座が終了。森安講師は「エジプト象形文字に溯り、ギリシャ文字がヨーロッパ系諸アルファベットのもとになり、北セム系アラム文字の系統からソグド文字の系譜が…」など、非アルファベット系ユーラシア古代文字の系譜を詳しく解説、片山講師は、明治時代のユーラシアへの関心がモンゴル帝国のヨーロッパ支配を見習う方向で現れていた事

例等を紹介しながらモンゴル高原のトルコ語碑文調査の最新の成果を紹介。宇田川講師は、鳥居龍蔵以来の手宮洞穴の古代ルーン文字の議論の系譜を紹介し、日本海沿岸のアイヌの交易と「エカシシロシ」との関わりについて自説を述べました。

大野は「突厥の環日本海進出がバックグランウンドにあり、馬市に関わる馬の交易も行われていた可能性がある」と意見を述べました。

１１月のキーワードは「歴史を作った人々」で

１３日「李陵と司馬遷」（林俊雄・創価大学教授）

２０日「ユーラシアの交易とソグド人」（吉田豊・神戸市外国語大学助教授）

２７日「マルコポーロの謎」（杉山正明・京都大学教授）

いずれも金曜日の夜６時半から、１回受講料２千円。友人をお誘いの上御出でください。

●キルギス・アカーエフ大統領来日歓迎パーティー

10月26日18:00から東京丸の内のパレスホテルに於いて経済４団体主催キルギス・アカーエフ大統領来日歓迎パーティーが開催された。経済４団体主催とは知らずクラブ代表大野氏の誘いに乗り、出席すればキルギスからの留学生が喜ぶかもしれないと、軽い気持ちで大野、井口、後藤の各氏と参加した。会場で井口さんに出席者の顔ぶれを教えて貰い、場違いのとんでもないところへ来てしまったと臍を噛んだが会費も払ってしまい後の祭り。

演壇の後ろには日本・キルギスタン両国の大きな国旗が並んでいた。キルギスの国旗は赤地の真ん中に鋸歯のある黄色い円があり、その中に上から見たユルタ（中国語ではパオ）の形が赤い線で描かれているものです。

会場は下手に動くとすぐに他人にぶつかってしまうほどの盛況。

主催者代表秋山住友商事会長の大統領来日歓迎挨拶でパーティーが始まり、氏は日本とキルギスの繋がりや独立時点からの大統領であるアカーエフ氏の紹介をされた。

「キルギスは世界一の親日国である。」という言葉を聞き、十数カ国しか訪れていない私も、本当にそうかもしれないなあと、旅で出会ったキルギスの人々を思いだした。

次にアカーエフ大統領の答礼挨拶が行われた。大統領はキルギスに対する日本の経済援助を一つずつ取り上げ、感謝の意を表わされた。また1991年の独立から現在に至るまでの改革等を説明し、日本からの投資を期待する種々の産業を挙げられた。

さらに、勤勉な日本人の労働観はどこにあるのかということを金閣寺建設に携わった職人の逸話を本で読み、見つけたと云う。それは「普通の働きをする職人」、「よく働く職人」、「本当によく働く職人」の3人に労働観を尋ねたところ、「今晩の粥のため。」、「家族を養うため。」、「将来に渡り評価されるような素晴らしい物を作るため。」と各々答えたという。この「将来に渡り評価されるような素晴らしい物を作るため。」、これこそ日本人の労働観だと感銘を受けたというようなことを話された。私は「今晩の粥のため。」の一人で恥ずかしかった。アカーエフ氏は日本の古典まで読んでいる読書家のようである。

大統領は挨拶を終えるとキルギスへの功労者に勲章や感謝状を授与された。

受章者は秋山住友商事会長を始め、大使経験者、学者など数名。ユーラシアンクラブ顧問の田中哲二氏（東芝顧問）も授与された。

臼井日出男代議士（元防衛庁長官）は、乾杯の挨拶の中で、「ここにいる皆様はキルギス好きのキルギス系日本人です」と面白い表現をした。

日本・キルギス双方から出た共通の言葉は「シルクロードの復活」だった。

乾杯が済むとキルギスの民族芸能団が民族音楽を演奏し、会場の雰囲気を盛り上げた。

パーティーがお開きになるころ大野、井口、後藤の各氏と私の4人は大統領と一緒に記念写真を撮り、握手までしてしまった。私の手をぎゅっと握り返したその手はふくよかでとても温かかった。高圧的なところの全くない大変魅力のある人物で、親近感を感じさせる風貌をしていた。資料には1944年生まれとあった。

最後に、アカーエフ氏の娘さんと思われる女性は、大統領ほどではないけど眉のくっきりした美人だったことを報告して終わりとします。

（報告／ノミスギノスギ）